

社交不安における注意バイアスおよび 連合学習の影響に関する研究

加 藤 宏 明

I. 問題と目的

社交不安症とは、他者によって注視されるかもしれない社交状況に関する著明または強烈な不安であり、社会生活において大きな影響を及ぼす精神疾患であると考えられている。社交不安には、注意の解放において、注意バイアスが生じているとされている。しかし、先行研究で主に使われている実験課題では、注意の解放を測定できているか疑問が残るとされている。注意バイアスを修正する方法として、注意バイアス修正（ABM）が存在するが、メタ分析の結果、効果は一貫しておらず、さらなる知見の積み重ねが必要であると考えられる。これらのことから、社交不安における、注意の解放の注意バイアスの測定と、連合学習課題による注意の修正の検討を目的とした。

II. 方 法

近畿圏の私立の4年制大学の大学生36名（男17名，女19名；平均年齢20.03歳 $\pm$ 1.55）を対象とした。質問紙は、LSAS-J（朝倉他，2002）、SFNE（笹川，2004）、STAI（清水・今栄，1981）を用いた。実験課題は、修正版情動空間的手がかり課題（上田・寺澤，2009）と連合学習課題（飯島・丹野，2015）を実施した。

実験手順は、質問紙（LSAS-J，SFNE，STAI-T）に回答したのち、研究の趣旨説明をし、参加の同意を得た。その後、質問紙（STAI-S）、注意バイアス測定Pre、連合学習課題、注意バイアス測定Postの順で実験を実施した。

III. 結果と考察

各尺度の高低 $\times$ 感情価の分散分析では、LSAS-Jのみ交互作用が見られ、低群においてネガティブの反応時間がポジティブの反応時間より有意に遅かった。そして、群 $\times$ 時期の分散分析では、ネガティブ学習群においてはネガティブからポジティブの反応時間の差はPostの方がPreより有意に遅かった。さらに、逆転学習群の逆転フェイズの学習成立までの試行数とSTAI-Tには有意傾向の正の相関が見られた。

これらの結果から、注意の解放における注意バイアスをうまく測定できなかった可能性が考えられる。また連合学習課題は、試行回数が多いほうがより潜在的に注意を修正する可能性が示唆された。そして、その学習成立までの試行数は特性不安と関連していると考えられる。